慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	アウグスティヌスにおけるanima/animus概念について：『ソリロクィア』を中心に
Sub Title	On the relation of anima and animus in St. Augustine
Author	佐藤, 真基子(Sato, Makiko)
Publisher	三田哲學會
Publication year	2006
Jtitle	哲學 No.116 (2006. 3) ,p.41- 55
JaLC DOI	
Abstract	The terminology of anima and animus in Augustine seems to be floating. G. O'Daly says that anima and animus can apply without distinction of meaning to human soul, and he concludes that the two terms are employed interchangeably. But in "Soliloquia", Augustine distinguishes between these terms. In this dialogue, he first declares that he wants to seize animus by the intellect, but afterwards, what he investigates is not animus but anima. In this paper, I would like to point out that Augustine's use of animus contains the meaning of self, and this self is the subject that uses rational soul. Rational soul can be used both in good and bad way. According to Augustine, the good use of it leads the soul to the vision of God. Man can uses rational soul in good way when he searches only for God and himself. Searching for himself is a preparatory condition for knowing God. That can be furnished with fides, spes and charitas. Thus, these virtues are considered to be something divine in anima. Augustine distinguishes two sides of the soul by using the words animus and anima, the rational soul as the searching subject and the soul as a place where the searching subject can find God.
Notes	投稿論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00150430-00000116-0041

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

投稿論文

アウグスティヌスにおける anima/animus 概念について

——『ソリロクィア』を中心に——

佐　藤　真基子*

On the Relation of *anima* and *animus* in St. Augustine

Makiko Sato

The terminology of *anima* and *animus* in Augustine seems to be floating. G. O'Daly says that *anima* and *animus* can apply without distinction of meaning to human soul, and he concludes that the two terms are employed interchangeably. But in "*Soliloquia*", Augustine distinguishes between these terms. In this dialogue, he first declares that he wants to seize *animus* by the intellect, but afterwards, what he investigates is not *animus* but *anima*.

In this paper, I would like to point out that Augustine's use of *animus* contains the meaning of self, and this self is the subject that uses rational soul. Rational soul can be used both in good and bad way. According to Augustine, the good use of it leads the soul to the vision of God.

Man can uses rational soul in good way when he searches only for God and himself. Searching for himself is a preparatory condition for knowing God. That can be furnished with *fides*, *spes* and *charitas*. Thus, these virtues are considered to be something divine in *anima*. Augustine distinguishes two sides of the soul by using the words *animus* and *anima*, the rational soul as the searching subject and the soul as a place where the searching subject can find God.

* 慶應義塾大学大学院文学研究科博士課程（哲学専攻）

神ないし真理を知ろうとするとき，自分自身の内面に目を向けなければならないという考えをプラトン主義の書物から学んだというアウグスティヌスは[1]，生涯にわたって神を探求するとともに魂を探求し続けた．ではアウグスティヌスにおいて，その探求の対象である魂とは，そもそもいかなる概念であったのか．この問題を考えるとき，回心直後，洗礼準備期間において著された『ソリロクィア』における魂概念が注目されるべきである．というのも，「神と魂を知りたい」という言明を端緒として神と魂を知ることについて議論が展開されている本著作は，アウグスティヌスが魂を主題として論じている最初の著作だからである．

アウグスティヌスの著作において一般に「魂」と訳されるラテン語は anima であるが，animus の語もしばしば用いられ，アウグスティヌスのいずれの著作においても，この二つの語がどのように概念的に区別されているのか，一見したところ明らかではない[2]．しかし，文脈によって使い分けられていると思われ，しかもその使い分け方に，アウグスティヌスの魂概念の独自性が表れていると考えられる．そこで本稿においては，『ソリロクィア』における anima/animus 概念を分析することによって，アウグスティヌスが「魂」をいかなるものとして捉えていたかを明らかにする．

---

[1] cf. *Confessiones* 7, 9～10 Watson は，アリストクレスやクレメンスにも，神を知ることと自己知を関係づける考え方があることを挙げ，当時共通して持たれた考え方であることを指摘している．G. Watson, *Saint Augustine: Soliloquies and Immortality of the Soul*, Warminster (1996).

[2] アウグスティヌスにおける anima/animus 概念については，E. Gilson (*Introduction à l'étude de saint Augustin*, 3e ed. (1949)，長澤信寿（『アウグスティーヌスの哲学研究』(1960) pp. 165–172), G. O'Daly (*Augustinus-Lexikon* (1986) pp. 315–340), P. Agaësse (*Bibliothèque augustinienne* 16 (1997) pp. 581–583) による解説があるが，いずれも，アウグスティヌスにおいて anima と animus の用語法は区別しがたいこと，animus は動物の魂については言われず人間の魂について言われることを指摘しているのみである．

I

『ソリロクィア』は，自らと自らの理性 ratio との対話という形式によって著された対話篇である．対話相手である自らの理性の，「何を知りたいのか」という問いかけに対してアウグスティヌスは「神と魂 anima を知りたい」と答え，議論が展開される[3]．

はじめに理性は，いかなる仕方で神が明らかにされたならば十分であるかを明らかにしなければならないと言う．アウグスティヌスは理性のこの提案に同意するが，自分は神を知りたい仕方でそれを知っていると言えるような神に似たものを知らないため，いかなる仕方で明らかにされたならば十分であるか分からないと答える．しかしまだ神を知らないにもかかわらず，神に似たものを知らないとなぜ言えるのか．理性によってこのことが指摘され，次の対話がなされる．

A. なぜなら，もし私が神に似たものを知っているとすれば，疑いなく私はそれを愛するはずだからだ．しかし今私は神と魂しか愛しておらず，そのどちらも知らない．

R. それでは君は，君の友人たちを愛していないのか．

A. どうして魂を愛している私が，彼らを愛さないことができるだろうか．

R. それでは君は同様に，ノミやナンキンムシも愛しているのか．

A. 私は魂 anima を愛していると言ったのであって，動物 animalia のことを言ったのではない．

R. では君の友人たちは人間ではないか，あるいは君は彼らを愛していないかのどちらかだ．というのも，人間は皆動物なのだから．そして君は動物を愛していないと言ったのだから．

[3] *Soliloquia* 1, 2, 7.

A. いや彼らは人間であり，且つ私は彼らを愛している．それは彼らが動物だからではなくて，人間だから愛している．つまり，彼らが理性な魂を持っているからなのだ．私は理性的な魂を，たとえ盗人においてでさえも愛する．というのも，私が愛しているものを悪い仕方で使用する人を，私が正当にも憎んだとしても，誰においてであれ理性を愛することは私に許されているからだ．したがって，私の友人たちが理性的な魂を善い仕方で使用すればするほど，あるいは善い仕方で使用しようと望めば望むほど，私は彼らを愛する．[4]

この対話においてアウグスティヌスは，探求の対象である神と魂を，愛していると述べている．そして，神と魂を愛しているというときの魂を限定している．理性が，魂を愛しているならば人間以外の動物も愛しているはずであると指摘するのは，anima が，生物がそれによって生きている生命の原理を意味する言葉だからである．しかし今，神と魂を愛しているというときの魂は生命原理としての魂ではない．そうではなくて，理性的魂 rationalis anima であるとアウグスティヌスは説明している．

アウグスティヌスにおいて理性的魂は，それを持っているという点で人間が他の動物と区別される魂のあり方であるとみなされている[5]．すなわち人間は誰でも理性的魂を持っている．しかし，理性的魂を愛することと人間を愛することは同じではないと思われる．上述の対話において，友人と盗人が言及されていることに注目しよう．盗人も人間であるから理性的魂を持っており，その理性的魂をアウグスティヌスは愛している．しかし

[4] *Sol.* 1, 2, 7.

[5] cf. *De ordine* 2, 11, 31 “ipse homo a veteribus sapientibus ita definitus est: homo est animal rationale mortale”, *De doctrina christiana* 1, 22, 20 “Magna enim quaedam res est homo, factus ad imaginem et similitudinem dei, non in quantum mortali corpore includitur, sed in quantum bestias rationalis animae honore praecedit.”

盗人は，その理性的魂を悪い仕方で使用している人の例である．盗人の持つ理性的魂は愛するが，それを悪い仕方で使用する盗人自身は愛するのではなく憎むとアウグスティヌスは述べている．

盗人と対照的であるのが友人である．友人は理性的魂を善い仕方で使用するないし善い仕方で使用しようと望む人の例である．彼らにおいては，彼らの持つ理性的魂を愛するし，その理性的魂が善い仕方で使用されればされるほど彼らを愛すると言われている．そうであるすると，愛の対象は，理性的魂とそれを善い仕方で使用する主体である人ということになる．しかしすでに示したように，魂を愛しているというときの魂は理性的魂であると明言されている．したがって，理性的魂を「使用」する主体を，理性的魂とは別の何かであるとみなすべきではないであろう．そうではなくて，使用する主体も理性的魂であるとみなすことが妥当であると思われる．かくして，アウグスティヌスは理性的魂に，「使用」するものとしての側面と「使用」されるものとしての側面を考えていたと予想される．このことを念頭に置いて，引き続く議論について検討しよう．

II

神と魂を愛しているというときの魂とは理性的魂であることが明らかにされた上で，対話は，神と魂を知りたいというときの魂についての議論に戻される．理性はアウグスティヌスに，友人を知っているような仕方で神を知ったならば十分であるかと問う．それに対してアウグスティヌスは，十分ではないし，友人のことも十分に知っていないと答え，次のように述べる．

> 感覚によって私が彼（友人）において知っていることというのは，たとえ感覚によって何かが知られるとしても，取るに足らなく，それで十分である．だが，それによって彼が私にとって友人であるあの部

分，つまり animus そのものを，私は知性によって把握したい.[6]

友人を十分に知らないと言われるときの知り方は，知性によって知るという仕方であると説明されている[7]．そして，そのような仕方で知りたい対象である魂は，ここで anima ではなく animus と表現されている．本著作においてアウグスティヌスは animus とは何かを説明していない．しかし，「それによって彼が私にとって友人であるあの部分」という上述の言明から，われわれは animus という言葉によって何が示されているか推測できる．というのも，先の，愛の対象である魂についての議論において，友人を愛するのは理性的魂を持っているからであると説明されていたからである．しかも，友人は盗人とは異なり，理性的魂を善用する人の例であった．したがって animus は，理性的魂を意味し，且つ，理性的魂を善用する主体としての理性的魂を意味する言葉として提示されていると考えられる．

アウグスティヌスが animus に，あらゆる人間が共通して持っている理性的魂のあり方ばかりでなく，それを使用する主体としてのあり方もみとめていることは注目されるべきである．なぜなら，理性的魂を持っていることは万人に共通であるが，使用する主体としての理性的魂は，善用するか悪用するかによって，各々別のあり方をすることになるからである．animus が，個人に固有の理性的魂のあり方も意味するとすれば，animus を探求することには，その人自身が理性的魂をいかなる仕方で使用しているかを探求するということが含まれることになるであろう．では，自らの理性的魂の使用の仕方を探求するとはいかなることであって，神を探求することとどのように関係するのか．

---

[6] *Sol.* 1, 3, 8.

[7] *Soliloquia* における知の概念については，拙論「魂を知るとはいかなることか」(『21 世紀人文 COE プログラム　心の解明に向けての統合的方法論構築　平成 16 年度成果報告書』慶應義塾大学) を参照のこと．

III

上記引用にあるように，アウグスティヌスは魂を知性によって把握したいと述べるが，知性 intellectus によって把握するとは，知る intellegere ことである．アウグスティヌスは，神を知ること intellegere は見ること videre であるとして，神を知ることがいかなる仕方で成立するかを視覚に準えた表現を用いて説明している[8]．その説明によれば，見ることは目を持つこと，目を向けること，見ることの三段階に分けて考えられる．目と見られる対象があれば見ることが成立するわけではない．目を持っていても対象に目を向けなければならないからである．つまり，目を向けること aspicere すなわち視覚 aspectus のはたらきが必要である．しかし目を向ければ見ることが成立するわけではない．見ることが成立するには，対象を見る視力 visio が必要である．かくして，目と視覚と視力がそろって初めて見ることが成立する．そしてアウグスティヌスは，見ることにおける目は，神を知ることにおける精神 mens に相当し，視覚は理性に，視力は知性に相当するとしている．すなわち神を知ることは，精神を持つこと，理性を働かせること，知性によって知ることという三段階で考えられているのである．

神を知ることにおけるこの三段階は，魂にとっての三つの務めであると言われている[9]．この魂の務めのうち，目すなわち精神を持つことについては，「善い仕方で使用することができる目を持つこと」と述べられている．「善い仕方で使用することができる」という説明がなされている点に注目しよう．見ることにおいて善い仕方で使用することができるとは，見られるべき対象を見ることができる，あるいは見る準備ができているということであろう．例えば，目が曇っていたり，目が病気であったりすれ

[8] *Sol.* 1, 6, 12.
[9] *Sol.* 1, 6, 12; 1, 7, 14.

ば，見ることも目を向けることもできないと思われる．じっさいアウグスティヌスは，善い仕方で使用することができる目を「健康な目」と表現している[10]．したがって，魂がそれを持つべき精神は健康な精神であり，健康な精神とはすなわち，それを使用することによって神を知ることができる精神のことであるといえる．以上のことから，善い仕方で使用すると言われるときの「善い仕方」とは神を知ることができる仕方のことであり，「使用する」とはそれを通して神を知ろうとすることであると解釈することができる．

「使用」の概念は，「享受」の概念と対をなす概念として，後年詳しく論じられている．例えば『キリスト教の教え』においてアウグスティヌスは，「享受するとは，愛によって，あるものにそれ自身のためにとどまることであるが，使用するとは，必要になったものを，愛される獲得されるべきものへと関係づけることである」と説明している．そして，享受されるべきものとは三位一体の神のみであり[11]，享受されるべきものに関係づけられない使用の仕方は，乱用あるいは悪用である[12]としている．すなわち「使用」する目的は神にあり，目的のために使用されるものが目的に関係づけられない使用の仕方は，悪い使用の仕方であると考えられているのである．『キリスト教の教え』において論じられているこうした「使用」の概念は，上述のように『ソリロクィア』の文脈からわれわれが読み取った「使用」の概念と一致するものである[13]．このことは，『ソリロクィア』

---

[10] *Sol.* 1, 6, 12 “oculi sani mens est ab omni labe corporis pura, id est, a cupiditatibus rerum mortalium iam remota atque purgata.”

[11] *De doctrina christiana* 1, 5, 5.

[12] *De doct. chr.* 1, 4, 4.

[13]「享受 frui, perfrui」の語も『ソリロクィア』において言及されているが，使用の概念と対になる概念として論じられてはいない．しかし目的である見るべき光や，至福の生について「享受」ということが言われている点は，後の著作において，使用の概念と対になる概念として論じられるときと一致している．cf. *Sol.* 1, 6, 13; 1, 12, 20.

においてアウグスティヌスが「善い仕方で使用する」と言うときの「善い仕方」が，神を知ることができるような仕方を意味することを裏付けるものである．

善い仕方で使用することができる精神とは，「死すべき性質の事物への欲求から離れて清められた」精神のことであるとアウグスティヌスは言う．アウグスティヌスにおいて死すべき性質の事物とはこの世の事物のことであると考えられているから，それ以外の事物とは神である．また，『ソリロクィア』第二巻において論じられているように，魂も不死であるとみなされている．すなわち，神と魂のみを知ろうとしているというあり方が，善い仕方で使用することができる精神を持つことであると考えられているのである．では，そうした精神を持つ主体は何か．すでに示したように，三つの務めが言われている魂は目を向けることすなわち理性を働かせることがその務めの一つである．このことから，精神を持ち，理性を働かせ，神を知る主体である魂は，理性的魂であるとみなしてよいであろう．したがって，理性的魂が，善い仕方で使用することができる精神，すなわち神を知ることができる精神を持つとは，理性的魂自身が神と魂のみを知ろうとすることであるといえる．そして本稿II章において示されたように，善い仕方で使用する主体である理性的魂はanimusと呼ばれている．以上のことから，animusを探求するということは，理性的魂自らが神と魂のみを知ろうとしているかどうかを点検し，神を知ることができるようなあり方を保とうとすることであると解釈できる[14]．

神を知ることができるあり方をしているか否かは，個々人によって異な

[14] 以上の議論から，悪人のように理性的魂を悪い仕方で使用するということは，神と魂を知ろうとしていないということであるといえよう．すなわち，悪人における理性的魂を探求するということは，神と魂を知ろうとしないということである．したがって，そのような理性的魂は探求の対象とはならない．探求の対象であるanimusが，善い仕方でも悪い仕方でも使用する主体であるのではなく，あくまで善い仕方で使用するないし善い仕方で使用しようとしている主体を意味していることは明らかである．

るのであるから，animus を探求することは，人間一般の持つ性質として理性的魂を探求することではなく，自己自身のあり方を探求することである．じっさい本対話篇において，対話のはじめは「神と魂を知りたい」という言明であったが，魂の三つの務めについて説明された後は，神と自分を知るという表現に移行している[15]．そして議論は，アウグスティヌス自らが「健康」であるかどうかについての検討に費やされている．その検討は，アウグスティヌスがこの世のものに対する欲望を克服しているか否かについてなされており，まさに，魂の目が神を見ることに向けられているかを確かめるものとなっている．そして，こうしたアウグスティヌス自身の理性的魂についての検討の間は，ほぼ anima ではなく animus の語が用いられている．「私たち（友人と自分）が一緒に心を合わせて私たちの魂と神を探求するために」という発言では anima の語が用いられているが，ここで言われている魂は個人の魂ではない．このように anima と animus の語が使い分けられていることは，animus に，神を探求するその人自身の理性的魂のあり方という意味が含められていることを示しているといえよう．

神を知りたいという望みをもって自分自身を探求する議論は，アウグスティヌスにおいていくつか見出されるが，中でも詳細に論じられているのは『告白』第十巻の議論である．その議論においてアウグスティヌスは，自らの内面に目を向け，生命原理としての自らの anima，感覚能力，そして記憶能力について検討し，いずれにも神は見出されず，それらを越えたところに上っていかなければならないとしている．この自分自身の探求において，感覚器官を通して感覚する自分は animus であると言われている[16]．また記憶の力についても，それは animus であって，自分自身であると説明されている[17]．探求の対象が生命原理としての anima にはない

[15] *Sol.* 1, 9, 16.
[16] *Conf.* 10, 7,11.
[17] *Conf.* 10, 17, 26.

こと，そして自分自身がanimusと呼ばれていることは，『ソリロクィア』における用語法と一致するものである．このことは，アウグスティヌスがanimusという言葉に，「その人自身」ないし「その人の理性的魂のあり方」という意味を付与し，animaと区別していることの証拠である．

しかし，『告白』において，animusを越えたところに神を探求しなければならないと考えられているように，『ソリロクィア』においても，アウグスティヌス自身の理性的魂の使用の仕方について検討された後には，animusを知りたいとは言われない．そうではなくて，ふたたび，「神と魂animaを知りたい」という言明に戻っている[18]．では，animusの探求の後に探求されるanimaとは，いかなる概念であるのか．

IV

上述の議論において明らかにしたように，神を知ることができる仕方で神を探求する主体としての理性的魂が，アウグスティヌスにおいてanimusと呼ばれており，したがってanimusを探求するとは，理性的魂自らが神を知ることができるあり方を保とうとすることであると考えられている．すなわちanimusを探求することは，神を知ることに近づくことであるといえる．しかし，神を知ることに近づくことと神を知るに至ることとは別である．したがって，神を知るに至るためにはanimusの探求だけでは不十分である．かくして，アウグスティヌスがanimusの探求を終えてanimaの探求に取り組んでいることは，animusの探求には含まれないものがanimaの探求に含まれ，それが神の探求に寄与すると彼が考えているからであると予想される．神と魂を知りたいというときの魂が理性的魂であることは明示されているから，animusの探求の後に探求されるanimaも理性的魂であることは明らかである．では，animusすなわち神を探求する主体以外の理性的魂のあり方とは何か．

[18] *Sol.* 1, 15, 27; 2, 1, 1.

ふたたび，魂の三つの務めについての議論に注目しよう．本稿 III 章において示したように，善い仕方で使用することができる目を持つこと，目を向けること，見ることが魂の務めであると言われている．しかし務めであるとはいえ，それを遂行することは容易ではないと思われる．というのも，アウグスティヌスにおいて神を見ることは至福の生に至ることであり，それは死後実現するものだからである．神を見ることは死後のことであるから，実現するという確証があるわけではない．しかも，我々はまだ神を見ていないのであるから，自らの探求の仕方が神を見ることができる仕方であるとの保証はない．また，アウグスティヌス自身も自らの精神の健康について詳細に検討を加えているように，この世のものへの欲望を克服することは容易にできることではない．じっさいアウグスティヌスは，この魂の務めが果たされるためには，さらに必要なものがあると言う．そしてその必要なものとは，信仰と希望と愛であると説明している[19]．

信仰と希望と愛が必要である理由は次のとおりである．例えば健康な目を持つことにおいては，健康でなければ見ることができないと信じなければ，自らの健康のために努力することがない．しかも自分が健康になりうると希望しなければ，健康になろうとはしない．さらに，すでに習慣的に心地よいものとなっている暗闇に満足するのではなく，見られるべき光を愛し求めなければ，健康になろうとはしない．かくして，健康な目を持つためには，信仰と希望と愛の三つが必要である．目を向けることについてもアウグスティヌスは同様の仕方で説明している．見ることについては，すでに見ることが成立しているのであるから信仰と希望は不要であるが，見るときにはいっそう愛するようになるであろうし，そこにとどまるためには愛が必要であるとしている[20]．

ところで，信じ，希望し，愛するのは，神を探求する主体である．すな

---

[19] *Sol.* 1, 6, 12.

[20] *Sol.* 1, 6, 12–1, 7, 14.

わち animus である．しかし，理性的魂が信じ，希望し，愛するということは一見奇妙であるように見える．理性的であることと，信じたり希望したりすることは相反すると考えられるからである．じっさいアウグスティヌスは，『ソリロクィア』と同年に書かれた『秩序論』において，「理性とは，学ばれたものを区別し結びつけることができる精神活動である[21]」と説明している．学問を成立させるような精神活動を理性とみなしているのである．しかしアウグスティヌスにおいて，学問的知と信じることとは相反しないと思われる．というのも，天体の動きという学問的知について説明しながら彼は，「私たちが知っていることはみな，おそらくは信じていると言っても正しいのです[22]」と述べている．すなわち，学問的知も確かな知であるとは言えず，ある意味では信じていることであるとみなしているのである[23]．希望と愛についても同様に，アウグスティヌスいおいては，理性的であるということと反しないと考えられる．

かくして，信じ，希望し，愛する主体は，神を知ろうとする主体である理性的魂，すなわち animus に他ならない．しかし，信じ，希望し，愛することは，我々が神を知ることを可能にさせるものとして提示されている．すなわち神を知ることを可能にさせる力を，我々すなわち理性的魂は持っているということである．アウグスティヌスは信じることについて次のように述べている．

A.　我々は，神がそばにいてくださるであろうことを信じよう．

R.　もしこのこと（信じること）が我々の力の中にあるならば，もちろ

---

[21] *De Ordine* 2, 11, 30 “Ratio est mentis motio, ea quae discuntur distinguendi et connectendi potens, qua duce uti ad Deum intellegendum.”

[22] *Sol.* 1, 3, 8.

[23] *Conf.* 6, 5, 7 においても同様の議論がされており，アウグスティヌスが，理性的であるということと信じることが反するものではないと考えていることを示している．

ん信じよう.

A. 神こそ我々の力なのだ[24].

信じる力は神であると言われている. その力を持っているのが我々であるならば, 我々は神であるのか. アウグスティヌスにおいてそのように考えられているとは思われない. というのも, アウグスティヌスは汎神論をとっていない. むしろ, 信じることは我々の持つ力でありながら, 我々が生み出した力ではないと考えられていると思われる. じっさいアウグスティヌスは, 本稿においてすでに示したように, 神を探求する行為の主体を animus の言葉で表して, 主体としてのあり方以外の理性的魂のあり方と区別している. そしてその animus が自分自身であるとしている. しかし力は行為の主体が持つものであって, 行為の主体すなわち自分自身ではない. アウグスティヌスの説明に従えば, 力 potestas は主体ではなく, 主体の行為を可能にさせるものとして提示されているものである. したがって, 主体としてのあり方以外の理性的魂のあり方に属しているとみなしうる. すなわち力ということに着目することによって, アウグスティヌスは, 神を知る主体としての理性的魂のあり方と, それを可能にさせる力を受け取っているものとしての理性的魂のあり方を区別しているのである.

神を理性的魂において力として有しているからといって, 我々は完全に神の力を実現しているわけではない. というのも, その力を「使用」するのが我々自身だからである. animus が理性的魂を善い仕方で使用したり悪い仕方で使用したりする主体であるということは, 使用の仕方を選び決めるのは自分自身であるということである. そうであるからこそ,

[24] *Sol.* 2, 1, 1.

animusには「その人自身」という意味も付与されていると考えられる[25].

以上の議論から，我々の理性的魂に，自らのあり方を選び決める主体としてのあり方と，自らがそこにおいて神を知ることができる場としてのあり方の二つのあり方が考えられていることが明らかにされた．そして，この主体としての理性的魂がanimusと呼ばれ，神を知る場としての理性的魂がanimaと呼ばれているのである．この後者の理性的魂のあり方を探求することが，『ソリロクィア』においてanimusの探求の後に取り組まれているanimaの探求であると思われる．animusが実現した行為も，その行為を実現できる力そのものはanimaにおいて見出される神に由来する．したがって人間は，神なしには神も自らの魂も知ることはできない．かくして人間の魂は神的なものではありながらも神ではなく，神を知ることすなわち至福の生に至ることも神によってはじめて可能となる．こうした人間と神の関係が，animusとanimaの語の区別において表れていることが本稿において示された．

[25] 自らの理性的魂を善い仕方で，あるいは悪い仕方で使用する主体としての自分ということが言われていることは重要である．『ソリロクィア』においては直接論じられていないが，「悪い仕方」の原因が自分自身に帰されていることは，後年それを主題として論じられる意志と悪の問題につながると思われるからである．『ソリロクィア』において悪の問題が決してないわけではなかったことは，「長い間様々なことに思いをめぐらし，何日も熱心に，私自身と私の善を探求したり，いかなる悪が避けられるべきかを探求している私に，突然，何者かが語りかけてきた」という文から本対話篇が始められていることにも表れているといえよう．